

## 青年期の自尊感情を規定する負の理想自己の領域について

甲南大学学生相談室 田 中 健 夫

### 1. 問題と目的

これまで自我理想は、主体がそうありたいと努めるモデルであり、自我にとって、自我がどの程度実際に実現されたかを図る基準の役を務める、精神内部にある比較的自立的な形成物\* という説明のように、肯定的価値をもつものとして想定されてきた。この自我理想\*\*を現実の適応との関連で捉えたRogersの研究（適応状態の改善に伴って現実自己と理想自己との間の不均衡は減少する）を契機に、理想－現実自己の関係のありかたが適応にどう関わるかという自己概念の研究が盛んに行なわれてきた。このように自我の成長方向の道標となるポジティブな理想の形成過程が問題とされてきたが、その失敗（あるいは不全）は同一性拡散状態として捉えられ、あるいは恥の感覚との関連で従来は論じられてきている。例えば、否定的価値基準が提示されたときに起こる、「否定的同一性（Erikson）」や「対抗同一性（福島）」の形成という問題や、同一化を拒否しようとする人に対する「否定的アイディティへの強いられた同一化」という特殊な文脈での論究などである（小此木，1993）。

しかし、青年期の自己概念を検討していくと、「このようにはなりたくない」という負の（あるいは否定的な）価値を担う理想自己表象が、適応や自尊感情を規定する上で固有の役割を果たしていると考えられる。青年期の否定的な自己像に関

連して、山田（1981、1989）は20答法での自由記述から、小学校から大学にかけて自己の内面的な特徴の記述が増え、青年期については自己のネガティブな側面の記述が多いことを指摘しており、佐藤（1994）の「自己嫌悪感」についての研究では、発達とともに自己嫌悪感の要因が分化していくことが示されている。何らかの参照枠が形成・内面化されて自己嫌悪感として感じられるようになり、その質も変化していくと考えられ、自我異和的で、しかも自我に対して規範的な役割を果たす「基準」としての役割をもつ負の理想自己像を想定することは有効だと思われる。これは、Markusら（1986）が自己概念の認知過程と動機づけの橋渡しをする概念として提唱した「可能自己Possible self」研究の中で検討されている問題でもある。例えば、Ogilvie（1989）は「理想自己－現実自己」の差異スコアよりも、‘undesired self’（かくなりたくない自己）－現実自己の差異スコアの方が満足度の強い相関があると、また遠藤（1992）は、現実自己と正の理想自己との差異、つまり“理想的な人間にいかに近いところにいるか”という認知よりも、負の理想自己との差異、すなわち“なりたくないものにいかになっていないか”という方が自尊感情の強い支えとなっている可能性を指摘している。このように負の理想像が影響力をもつ背景としては、遠藤も論究しているように、日本的な「吾にも誇りはあるんじゃ」という

\* ラプランシュ／ポンタリス『精神分析用語辞典』による。例えばKernberg（1976）は、個人の自我への評価や行動基準のうち、自我親和的な側面が自我に統合された結果として生じたものとして自我理想を捉えているが、「個人に親和的な個人にとっての理想を表現した在り方を示すもの（こう在りたい姿）」（岡田、1987）と言ってよいであろう。

\*\* 自分自身により対象として捉えられた自分を意味する場合は“自己self”の語が用いられることが多い（梶田、1980）ということからも、以降は現実自己real-selfという概念に対応させて理想自己ideal-selfを用いることにする。

文化、つまり負の理想自己との比較による「ああ悪くはなっていない」という下支えにより自尊感情が保たれるという機制が影響していると考えられる。「こうはなりたくない」という負の理想自己像は、他人の目（まなざし）の意識が強い日本的文化のもとでは特に重要な役割をなしていると考えられ、「人から後ろ指さされないように」などの慣用句がネガティブ側面を否定する形で用いられていることも、この仮定を裏づけるものであろう。

自己概念を考える際に、自己認知の諸側面の中で中心的な働きをする側面を指摘した山本ら（1982）の研究は注目され、肯定的な項目に対する評定の分析ではあるが、大学生の場合“優しさ”“容貌”“生き方”の3側面の認知が自己評価と強い関わりをもち、女子の場合には特に他者を意識した側面が重要な働きをしているという。また、中学生を対象にネガティブな価値基準として重要な要因を抽出した遠藤ら（1993）は、「学力・容姿」の影響力が最も大きい、つまり‘自分は容姿や学力の点でひどくはない’と考える程度に応じて自尊感情の高さが規定されると結論づけている（性差も指摘されている）。

本研究では高校生・大学生を対象に、自尊感情と強く関わる負の理想自己の領域を明らかにすることを目的とする。また、遠藤・山本らの研究いづれにおいても性差が指摘されているので、性差についても比較検討したい。

## 方 法

被験者：関西の大学・短大・専門学校生（以降「大学生」とする）289名（男129名・女160名、年齢18～24歳、平均19.9歳）、及び京都市・長野県の高校生136名（男80名・女56名、年齢16

～18歳、平均17.0歳）が被験者とされた。

手続き：大学生については、心理学及び哲学受講の学生を対象に教室で、高校生にはクラス担任が教示を行い授業中に実施した。調査は、大学生は1994年10月、高校生は1994年10～12月に行われた。

## 調査材料：

1. 自己像についての質問項目（SD法）：現実の自己像（RS）・負の理想自己像（FS）\* について、各々16の形容詞対に5件法で評定してもらった。

形容詞対は、一般性のある自我の次元を見出した尺度として、長島ら（1966）によるSelf-differential 自我概念尺度（高校生用）から、各因子について因子負荷量の高い形容詞対を選び、それに加えて、対象のスティグマについてイメージ測定したOrsted, D. W. & Durham, K. (1976) が用いたものを付加した。20の形容詞対について予備調査、最終的に4因子16の形容詞対を使用した。

2. 自尊感情：Rosendberg(1965)による自尊感情尺度（星野訳、1970）のうち、予備調査で除かれた、項目8「私はもっと自分自身を尊重（尊敬）する気持ちになりたいと思う」以外の9項目。

回答の得点化：自己像についての質問項目は、否定的・消極的な形容詞の側に1点を、自尊感情についても自己評価が高いほど高得点になるようにして9項目の合計得点をもって自尊感情得点（以下SE得点）とした。

## 結果と考察

SE得点の平均値は、高校生28.9（SD=6.1）、大学生29.5（SD=5.7）であった。性差は高校生に

\*負の理想自己（“Feared Self”：「不安可能自己」とも訳される）の教示は、Markus & Nurius(1986)を参考に、「“こうはなりたくない、こうなることを恐れるという自分”について、あてはまるところに○をして下さい」とした。

はみられず、大学生は女子が男子より低い傾向  
(男30.2、女子29.0、 $t=-1.7$ 、 $<.10$ )を示した。  
自己像についての質問項目を因子分析した結果、

高校生・大学生ともに現実自己(RS)について順  
位は異なるものの、ほぼ同じ4因子を抽出した。  
Table1・2 \*

Table1. 現実自己RSの因子分析(高校生・Varimax回転)

	Fac.1	Fac.2	Fac.3	Fac.4	$h^2$
14 陰気な - 陽気な	.84	-.09	.02	-.02	.72
8 内向的な - 外向的な	.82	.01	-.04	.18	.70
16 閉鎖的な - 開放的な	.80	-.10	-.08	.02	.65
1 静かな - にぎやかな	.79	-.03	-.27	-.07	.70
2 臆病な - 大胆な	.70	.16	-.01	.28	.59
10 弱い - 強い	.55	-.01	.07	.33	.42
9 ふまじめな - まじめな	-.12	.78	.15	.05	.65
3 なまけものな - 勤勉な	.24	.73	.20	.00	.64
13 軽率な - 慎重な	-.02	.71	.17	.01	.53
15 不誠実な - 誠実な	.04	.50	.19	.49	.51
12 やわらかい - かたい	.39	.52	.22	.04	.47
4 短気な - 気長な	-.01	.03	.88	.12	.79
7 はげしい - おだやかな	-.15	.21	.72	-.37	.72
11 感情的な - 理性的な	-.10	.34	.58	.10	.48
6 個性のない - 个性的な	.22	-.18	-.24	.72	.66
5 子どもっぽい - 大人っぽい	.10	.37	.31	.61	.62
寄与率	3.74	2.55	2.03	1.53	
因子間相関行列	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	
第I因子(社交性)					$\alpha=.86$
第II因子(まじめさ)	.02				$\alpha=.74$
第III因子(情緒安定性)	-.18*	.38***			$\alpha=.69$
第IV因子(個性)	.33***	.26***	-.01		
SE得点	.32***	.39***	.16+	.40***	$\alpha=.82$

\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$  + $p<.10$

\*各因子・SE得点間の相関行列、Cronbachの $\alpha$ 係数を併記した。なお、因子負荷量0.5以上の項目をとり、各因子を構成する $\alpha$ 係数の値を下げる、高校生：項目12と大学生：項目7を除外した。



Table2. 現実自己RSの因子分析 (大学生・Varimax回転)

	Fac.1	Fac.2	Fac.3	Fac.4	h <sup>2</sup>
16 閉鎖的な - 開放的な	.82	.05	.23	.03	.72
1 静かな - にぎやかな	.81	-.14	.09	-.19	.71
8 内向的な - 外向的な	.80	.04	.33	.02	.74
14 陰気な - 陽気な	.79	.14	.24	-.08	.71
9 ふまじめな - まじめな	.03	.78	-.02	.05	.61
15 不誠実な - 誠実な	.17	.73	.12	-.01	.58
3 なまけものな - 勤勉な	.09	.67	.10	.15	.49
13 軽率な - 慎重な	-.23	.66	-.02	.18	.51
12 やわらかい - かたい	.38	-.40	-.20	.27	.42
2 臆病な - 大胆な	.31	.08	.68	-.09	.58
10 弱い - 強い	.39	.15	.68	.11	.66
6 個性のない - 个性的な	.16	.09	.61	-.06	.41
7 はげしい - おだやかな	-.01	.26	-.52	.52	.61
11 感情的な - 理性的な	-.18	-.04	-.07	.70	.52
5 子どもっぽい - 大人っぽい	-.06	.13	.33	.68	.60
4 短気な - 気長な	.13	.18	-.28	.67	.59
寄与率	3.14	2.39	2.10	1.87	
因子間相関行列	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	
第Ⅰ因子(社交性)					$\alpha=.87$
第Ⅱ因子(まじめさ)	.03				$\alpha=.71$
第Ⅲ因子(強さ・個性)	.52***	.17**			$\alpha=.69$
第Ⅳ因子(情緒安定性)	-.09	.23***	-.09		$\alpha=.53$
SE得点	.47***	.38***	.55***	.14*	$\alpha=.79$

SE得点との相関は、高校生・大学生いずれも＜社交性＞＜まじめさ＞＜個性(強さ)＞についてのポジティブな現実認知がSE得点と強い正の相関にあり、＜情緒安定性＞に関しては「気長、理性的」とであるという認知がSE得点の高さと有意傾向にあった。つまり、各因子について現実自己を肯定的にみている人の自尊感情は、否定的に認知している人よりも高いといえる。

次に、4因子の中で、どの因子の差異得点\*が最もSE得点の高低に関係しているか、つまりどの領域についてのネガティブな自己を否定することが自尊感情の高さに結びつくかをみるため、SE得点を基準変数、各因子の差異得点を説明変数とした重回帰分析を行い、高校生と大学生の比較、性差、及び現実自己のみを指標とした時との予測性の高さという点について考察する。Table1 3・4\*\*

\* 各評定値間での負の理想自己と現実自己の隔たり (Discrepancy)であるDスコア ( $D = \sqrt{\sum d^2}$ ) の加算平均値によって算出した。

\*\*標準偏回帰係数を示した。



Table3.

<高校生> SE得点を基準変数、各因子  
現実自己像平均値を説明変数とした重回帰分析

	男子	女子	全体
第Ⅰ因子(社交性)	.21 <sup>+</sup>	.39**	.28**
第Ⅱ因子(まじめさ)	.16	.49***	.29***
第Ⅲ因子(情緒安定性)	.18	.01	.11
第Ⅳ因子(個性)	.29*	.11	.25**
説明率	.25***	.49***	.31***

差異得点(絶対値)を説明変数とした重回帰分析

	男子	女子	全体
第Ⅰ因子(社交性)	.18	.00	.14
第Ⅱ因子(まじめさ)	.10	.24 <sup>+</sup>	.12
第Ⅲ因子(情緒安定性)	.24*	.12	.10
第Ⅳ因子(個性)	.07	.16	.10
説明率	.19**	.20*	.15***

大学生の場合には第Ⅲ因子<強さ・個性>の偏回帰係数の値が最も大きく(.23,  $p < .001$ )、次いで第Ⅰ因子<社交性>(.17,  $p < .001$ )のSE得点への強い影響力があり、第Ⅱ因子<まじめさ>は有意傾向、第Ⅳ因子の影響力は認められなかった。つまり、「個性的であること」や「大胆さ」「強さ」に関わる領域と<社交性>の領域で、自分が「こうなりたくない」と考える表象に現実の自己像がない程度において、自尊感情は保たれているということである。これは逆に「個性的でありたくない」と思っている人にとっては、現実の自己像が個性的で“人と違う”と認知することも自尊感情が脅かされる事態であると推測されるわけである。以上は男女ともに同様の傾向を示しているが、女子の場合、<まじめさ>に関わる負の理想自己像も自尊感情を規定する傾向にあった。

一方、高校生の場合には全体としては影響力をもつ因子がなく、女子の場合に<まじめさ>が有意傾向、男子の場合に<情緒安定性>が有意に影響

Table4.

<大学生> SE得点を基準変数、各因子  
現実自己像平均値を説明変数とした重回帰分析

	男子	女子	全体
第Ⅰ因子(社交性)	.41***	.27***	.31***
第Ⅱ因子(まじめさ)	.38***	.34***	.34***
第Ⅲ因子(強さ・個性)	.31***	.38***	.39***
第Ⅳ因子(情緒安定性)	.04	.24**	.18**
説明率	.48***	.47***	.46***

差異得点(絶対値)を説明変数とした重回帰分析

	男子	女子	全体
第Ⅰ因子(社交性)	.21*	.16 <sup>+</sup>	.17**
第Ⅱ因子(まじめさ)	.07	.14 <sup>+</sup>	.10 <sup>+</sup>
第Ⅲ因子(強さ・個性)	.20*	.23**	.23***
第Ⅳ因子(情緒安定性)	.05	.06	.01
説明率	.25***	.22***	.24***

をもっていることが示された。僅かに「ふまじめな」あるいは「短気な」人間ではないという認知が、それぞれ女子と男子に影響力をもつことは、高校生段階では、親や周囲から期待される理想像（その否定的な側面）がまだ十分に内面化されておらず、超自我的な懲罰の意味をもって関わっているとされた。そして、青年期の後期になるにつれて負の理想像も基準として内面化されていくことが示唆されており、高校・大学と進むに連れて、より内面的な要因や特性に対する評価が自尊感情にとって決定的な役割を果たすようになるという先行研究と同様の結果になった。

現実自己の各因子平均値を説明変数とした方が、高校生・大学生いずれも高い説明率であり、負の理想像を自尊感情を下支えする基準として想定することの有効性を十分に示していないとも考えられ、これは今後の検討課題であろう。全体としては、大学生の場合、全ての因子について肯定的な現実自己認知をしている人のSE得点は有意に高く

(ここでも<個性・強さ>の偏回帰係数が最高値)、高校生でも<社交性><まじめさ><個性>の肯定的な認知とSE得点の高さが強く関わっている。高校生の女子の場合、<まじめさ><社交性>について現実の自己像を肯定的に認知することが、男子と比較して自尊感情に大きな影響力をもつことが示されている。

これまで時に青年期のクライアントが語る「個性的・大胆でありたい」という希望と、逆に「目立ちたくない、個性的であることを極力抑えたい」という葛藤に出会うことがあった。そこでは、個性や社交性について、個人史の中でどのような否定的な理想自己表象が形成され、内面化されてきているかを知ることが重要になってこよう。

「個性のない自分になりたくない」あるいは「個性が強い、大胆な人間にはなりたくない」という逆方向ではあるが、それぞれの個人にとってこのような否定的な理想自己像が、自尊感情を支える上で重要な役割を担っていると言えよう。これは、一つには高校への適応や大学進学という強い価値基準により、高校まで「個性的であること」「社交的なこと」を押さえてきた、あるいは逆に強力な価値基準に抗して「個性的」に生きてきて周囲との摩擦を感じてきた個人が、それぞれを否定的な理想像として取り込み、内面化して、自己評価基準としての役割を担うようになってきたものと推測される。

#### 引用・参考文献

遠藤由美 (1992) 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究63-3, 214-217.

遠藤由美・西 芳弘 (1993) 青年前期における自己評価の研究—認知された自己の諸領域との関係— 上越教育大学研究紀要13-1, 111-119.

Erikson, E. H. (1959) Identity and the Life Cycle. W. Norton. 『自我同一性』小此木啓吾 (訳) 1973 誠信書房

Freud, S. (1914) フロイト著作集5 『ナルシシズ

ム入門』懸田・高橋他訳 人文書院

星野 命 (1970) 感情の心理と教育 (二) 児童心理8, 161-193.

梶田叡一 (1980) 自己意識の心理学 東京大学出版会

Kernberg, O. (1976) Object relations theory and clinical psychoanalysis. Jason Aronson Inc. 『対象関係論とその臨床』前田重治監訳 1983 岩崎学術出版社

Markus, H. & Nurius, P. (1986) Possible Selves. American Psychologist, 41-9, 954-969.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 (1967) 自我と適応の関係についての研究: Self-Differentialの作成 東京教育大学教育学部紀要13, 59-84.

小此木啓吾 (1993) アイデンティティ論の成り立ちとその臨床課題 精神分析研究37-1, 15-40.

Ogilvie, D. M. (1987) The Undesired Self: A Neglected Variable in personality Research. Journal of Personality and Social Psychology, 52-2, 379-385.

岡田 努 (1987) 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究35, 116-121.

Olmsted, D. W. & Durham, K. (1976) Stability of Mental Health Attitudes: A Semantic Differential Study. Journal of Health and Social Behavior, 17(March), 35-44.

佐藤有耕 (1994) 青年期における自己嫌悪感の発達的变化 教育心理学研究42, 253-260.

山田ゆかり (1981) 青年期における自己概念 (I) 日本教育心理学会第23回総会発表論文集

山田ゆかり (1989) 青年期における自己概念の形成過程に関する研究 心理学研究60-4, 245-252.

---

ABSTRACT

The Negative Ideal-self as a Determinant of Self-esteem in Adolescence

TANAKA, Takeo  
*Konan University*

This study is attempted to clarify the domain of the negative ideal-self which had an influence on self-esteem in adolescence. A questionnaire inquiring into real- and negative ideal-self images and self-esteem(Rosenberg) was conducted on 136 high-school students and 289 university students.

As for university students, the result showed that 'individuality'('boldness') and 'sociability' correlate significantly with self-esteem, but in case of highschool students, the result showed no correlation. In short, self-esteem is supported by a recognition of how much one is not a person unpossessing individuality. These findings suggested that negative ideal-self images, especially those concerning individuality and sociability are internalized gradually in late adolescence.

*Key words:* negative ideal-self, real-self, self-esteem, individuality, adolescence

---